

多発肝転移を伴う子宮体部漿液性癌に対する化学療法に温熱療法を併用し加温領域と非加温領域で腫瘍縮小効果に差異を生じた 1 例

産業医科大学 放射線科学 中原 惣太、垣野内 祥、板村 紘英、森崎 貴博、興梠 征典

産業医科大学 産婦人科学 植田 多恵子、鏡 誠治、吉野 潔

【目的】子宮体癌の中で漿液性癌は悪性度が高く予後不良とされる。遠隔転移を有する子宮体癌は化学療法が治療の主体となるが、温熱療法は化学療法の治療効果を増感しうる。我々は肝転移を伴う子宮体部漿液性癌に対する化学療法に温熱療法を併用し、加温領域と非加温領域で腫瘍縮小効果に差異を生じた 1 例を経験したので報告する。

【症例】70 代、女性の方で子宮に 14cm 大の腫瘍を認め CT で多発する肝転移を伴っていた。生検の結果、子宮体癌（T4N1M1 漿液性癌）と診断した。初回治療としてパクリタキセル（80mg/m²）とカルボプラチン（AUC 2）の 1 週毎投与を開始し、3 回目の投与时より温熱療法を毎週 2 回併用した。容量加温装置を用いて巨大な病変のある全骨盤領域を 30cm 径の電極により加温した。1 回 50 分の加温を行い直腸腔内温度は毎回 CEM43T90=1 分以上と良好な加温が可能であった。加温開始 1 ヶ月後の CT で、加温領域である子宮原発巣の縮小割合は 67%、一方で非加温領域の多発肝転移は 127%と増大していた。その後、化学療法は継続投与され温熱療法は肝臓を含む上腹部領域と全骨盤領域を交互に加温するように変更した。2 ヶ月後の CT では、子宮原発巣は 49%と更に縮小し多発肝転移も 94%と縮小に転じた。

【結語】加温部位に応じて腫瘍縮小が得られ温熱療法による良好な治療効果が示唆された 1 例である。文献的考察を含め報告する。